

高齢者110番チーム 議論まとめ

A部会（地域資源・ニーズ把握部会）や高齢者110番チームで検討してきた内容をまとめて報告します。

1. 高齢者110番チームとしての結論

①「高齢者のこと110番」活用の提案

高齢者が住み慣れた地域で楽しく生活を継続するためには、困りごとを抱えた人が地域包括支援センターにつながる何がより大切です。そこで、困りごとの相談先としての役割が浸透することを目指してわかりやすいキャッチフレーズの活用を提案します。

②互助の取り組みは来年度以降の協議体の課題

向こう三軒両隣の関係のように、地域の互助の体制を推進していくことが重要であり、協議体の役割であると高齢者110番の議論を通じて再認識しました。今後は、協議体（本会）で互助の体制の推進について考えることが重要と考えます。

2. 検討にいたった経緯（概要）

- ・ 高齢者の支え合いを支援することを目的に、子どもSOSのような形でステッカーや支え合いリングを作成できないかと意見があり、意見交換が始まりました。

3. 話を進めていくうちにわかったこと

- ・ ダイヤルを設けている自治体、駆け込み寺を作っている他市の自治会、NPO法人が地域食堂として行っている他市の取り組み などなど、全国的に様々な取り組みが行われ、名称や活動の定義はありませんでした。
- ・ 清瀬市内の取り組みについて情報交換を行い、ふれあいネットワーク事業や認知症サポーター養成講座の実施状況を知ることができました。

★できたらいいな★

- ・ ステッカーを作り自宅や自転車につける
- ・ 困りごとを専門機関につなげる
- ・ “楽しみ”に関する情報交換も大事

▲気をつけたいこと▲

- ・ 夜間の訪問なども考えられる
- ・ 相談の対応は住民にとって負担になる
- ・ そもそも相談はくるのか

- 住民が相談に乗ることや専門機関につなぐことは負担が大きく、現実的ではないのではないか。
- 人と人が普段から気軽につながり、地域のことに関心をもつ方が増えると良い地域になるのではないか。

4. 高齢者110番チームとしての整理

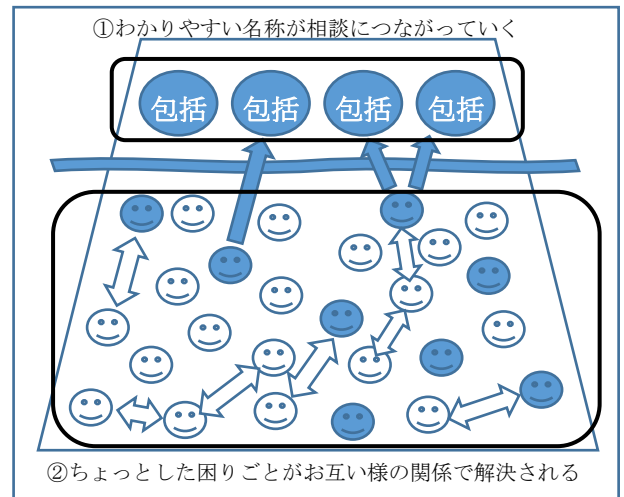
これまでの議論をふまえ、委員の中で2つの視点
が生まれていたことを整理しました。

<人（困りごと）と包括をつなぐ視点>

地域包括支援センターの認知度がまだまだ低
く、困りごとを抱えた人が相談につながっていな
い可能性が高いため、高齢者110番の取り組み
を通じて、包括へと相談がつながりやすくなる仕
組みを目指す視点。

<人と人をつなぐ取り組みの実施>

向こう3軒両隣のような気軽に相談できる関係
を目指し、地域で起きていることに気づくことが
できる人を増やすことが重要ではないかとい
う視点。



【参考：これまでの議論の経過】

時期	内容
平成29年11月	支え合うきよせ委員会の活動を市民に見えるようにすること、地域資源の整理が課題であり、支え合いファイルやノートの作成を進めていた。意見交換会を実施する中で、地域課題を解決するために個人情報勉強会の話がでたほか、高齢者の支え合いを支援できる方は子供SOSのような形で自宅にステッカーを貼ることや支え合いリングを作れないか意見が上がった。
平成30年 2月	支え合いファイルの今後の活用として、電子化の検討（HPへの掲載）を行った。また、来年度の意見交換会の開催について議論をする中で、支え合うきよせ委員会の活動や支え合いの重要性を伝える必要性を確認した。その中で、高齢者110番という名称の取り組みの実施が、「支え合いの取り組みのサポーターを増やすきっかけになる」、「相談できる拠点にできないか」、「悪用されないよう慎重に進めたい」、「自宅や自転車にマークをつけたい」、「商店だけでなく、個人宅にもお願いしたい」など、取り組みのイメージが広がった。
平成30年 6月	A部会の開催は、本会後に開催するのみと確認した。生活支援COを中心に、HPの作成や個人情報勉強会の企画・調整を行っていた。意見交換の時間も限られるため、少人数で意見交換を行うこととなった。
平成30年 8月	少人数で集まり、他自治体の取り組みについて情報交換。その上で、新しい仕組みづくりではなく、既存の仕組みや活動同士の連携が大事だと確認。地域内で住民同士がつながる手段（潤滑油や媒介手段）について考えることが支え合うきよせ委員会の役割であり、市内の取り組みや活動について知ること、連携できる部分を探る視点を持つことが大事という結論にいたる。
平成30年 9月	第1回110番チームの実施。既存の取り組みの情報交換を行った他、包括の名称が周知されていないことが問題ではないか、協力者はいるのかと

	<p>いった問題提起の意見もある。その上で求められている機能を3つに分類した。</p> <p><u>相談窓口機能</u>：身近に「高齢者〇〇」と書かれたお宅やお店があり、簡単な内容はその場で解決。解決できない内容は、専門機関につなぐ。相談窓口を行う方に対しては一方的な資料提供のみではなく、更新制とし、一定期間ごとに研修を行う。</p> <p><u>110番機能</u>：自宅やお店に、「高齢者110番 〇〇にご連絡ください」という一目でわかるステッカーなどが貼ってあり、そこに連絡すると対応してくれる。</p> <p><u>生活支援機能</u>：身近に「高齢者〇〇」と書かれたお宅やお店があり、相談と共に、ちょっとした生活支援で解決してくれる（電球交換や重い荷物の移動など）</p> <p>相談窓口機能が、A部会で話し合うべき課題と考えられ、この機能について検討することを確認する。</p>
平成30年10月	<p>第2回110番チームの実施。生活支援COが資料を作成して提示。5W2Hの視点で機能の整理を行う。</p> <p>自宅前にステッカーを掲示して、包括や地域の社会資源を紹介する役割を想定して議論を進めるが、「実際には、相談しやすい人に相談するのは」「夜間の相談などに来た場合はどうするか」と意見あり。「相談」の内容が多岐に渡ると考えられ、大きな負担が予測されることから、この機能についても役割の見直しが必要だという結論にいたる。その上で、地域のハブ（情報のつなぎ役、相談機関の紹介役）になる人の存在が重要とチームで確認。認知症サポーターとの連携による取り組みや人の養成をする勉強会企画なども行えるといった意見がある。</p>
平成30年11月	<p>第3回110番チームの実施。「最近、近くに新聞紙がたまっている自宅がある」など、地域で起きていることに気づくことができる人を増やすことが重要ではないかという意見、他の取り組みとの連携に関する具体例として、認知症サポーターにオレンジリング着用を呼びかけ、地域での声かけや支え合いを意識してもらおうキャンペーンなどが具体例としてあがる。議論の経過を中間報告として報告することとなる。</p>
平成31年 1月	<p>第4回110番チームの実施。チームで意見をまとめるために、生活支援COが作成した資料について意見交換を行う。議論を進める中で、「高齢者のこと110番プロジェクト」に、①人（困りごと）と包括をつなぐ視点、②人と人をつなぐ視点があることを確認。高齢者が地域での生活を継続するためには、高齢者の相談窓口である包括の名称が住民に浸透することや困りごとを包括につなぐ人の存在が大事であるとしながら、支え合うきよせ委員会の役割は自助や互助の関係づくりであることを再度確認。支え合うきよせ委員会全体への問題提起としてはどうかとの意見があった。※実施するかどうかは、取り組みの名称を含めて本会で検討してもらうため、上記のように記載</p>